

## 『新地バスターミナルの待合所』

稲森（いなもり）

朝永（ともなが）

折江（おりえ）

アナウンス（女性の声）

高校の制服を着た稲森が待合所の椅子に座り、バスを待っている。

アナウンス 「ドアが閉まります。ご注意ください。ドアが閉まります。ご注意ください。」

バッグを肩にかけてダイエーのレジ袋を提げた朝永。

歩いて来て、稲森の隣に座る。

と、バッグが稲森の腕に当たる。

朝永「ごめんなさい。」

稲森「いえ……。」

朝永、レジ袋からチョコレートの箱を出し、ひとつずつ銀紙を剥いで食べ始める。

ひとつ、またひとつ……さらにひとつ。

稲森、朝永をちらりと見る。

朝永、視線に気付く。

朝永「食べます？」

稲森「え、いえ……。」

朝永「……部活？」

稲森「え、」

朝永「日曜だから。」

稲森「あ、英検で……。」

朝永、黙ってチョコレートの銀紙を剥ぐ。

稲盛「英語検定で……」

朝永「知ってる知ってる。あれ、英検で日曜だったっけ？」

稲森「です……。」

朝永「へー、だったっけ、え、これから？」

稲森「いえ、終わって……帰りです……。」

朝永「へー。」

朝永、チョコレートを食べる。

稲森「……。」

稲森、カバンからウォークマンとイヤホンを出す。

朝永、その様子を見ている。

朝永「なんですか。」

稲森「え？」

稲森、朝永を見る。

朝永「それ。なんか、英会話のやつとか？」

稲森「いえ……。」

朝永「だよなー。音楽？」

稲森「はい……。」

朝永「何聴いとると？」

稲森「……カーペンターズ、です……。」

朝永「へー。英語だね。」

稲森「ですね……。」

朝永「カーペンターズ好きなの？」

稲森「はい……。」

朝永「ふうん。」

稲森「姉が好きで、わたしも……。」

朝永「なにが好き？曲。」

稲森「あ……、どれも好きですけど……。」

朝永「えーなんかあるでしょ、私はこれ！っていうの。」

稲森「・・・Close to You、とか・・・」

朝永「あー。いいよねー。」

朝永、黙ってチョコレート銀紙を剥ぐ。

稲森「・・・。」

朝永「知つとるよ。ちゃんちゃんちゃん、ちゃらららーってやつでしょ。」

稲森「ああ、はい。」

朝永「知つとる知つとる。」

稲森、イヤホンを耳に。

朝永「あ。」

朝永、稲森をつつき、案内窓口付近にいる男を見るよう促す。

稲森、イヤホンを外す。

朝永「あのひと。」

稲森「はい・・・。」

朝永「窓口のお姉さんにいつも何か言つとるんよ。ほら、あの黄色いパーカーのおじさん。

結構なれなれしい感じでき。」

稲森「定期券とか買ってたんじゃないですか？」

朝永「いやー、買ってない、買ってない。昨日も見てたもん私。」

稲森「・・・。」

朝永「なんなんだろ、今日閉まってんのに来とるし。」

稲森「ああ・・・。」

朝永「結構見かけるもんね。なんか話して、軽やかに去っていくの。」

稲森「・・・。」

朝永、男の様子を見ながらチョコレートを食べる。

稲森「・・・バス、待ってらっしゃるんですか。」

朝永「私？」

稲森、うなずく。

朝永「休憩しとるだけ。」

稲森「バスに乗るんじゃないんですか？」

朝永「うち、こっから歩いて帰れるから。どこね？」

稲森「え、」

朝永「家どこ？」

稲森「・・・長与、です・・・。」

朝永「あー、家たくさんあるところ。」

稲森「です。」

朝永「こっからだとどれくらい？」

稲森「一時間くらい・・・」

と、折江が案内所に入ってくる。稲森、気付く。

折江、気付かないまま、少し離れた椅子に座ろうとする。

稲森「折江くん。」

折江、声に気付く。

折江「ああ。」

折江、稲森のところにやってくる。

折江「どうしたの？」

稲森「ああ、帰るところ。」

折江「学校やったと？」

稲森「うん。」

折江「部活？」

稲森「や、英検。」

折江「あー、そっか。英検かー。え、何級受けたの？」

稲森「2級。」

折江「へえー。」

稲森「折江くんは？」

折江「俺も帰り。学校じゃないけど。」

朝永、ゴミをレジ袋に入れて立ちあがり、「じゃ。」とか言って、去っていく。

稲森、軽く会釈。

稲森「今のひとチョコレートすごい食べてた。」

折江「へ？」

稲森「チョコレートをね、ずーっと食べてるの。」

折江「知り合い？」

稲森「ううん。知らないひと。」

折江「へえ……。」

稲森「なんか、ストレスかな。」

折江「そんな（に食べてたの）？」

稲森「うん。」

折江、少し笑う。

稲森「バス、何時？」

折江「あー、1時半の。」

稲森「あ、一緒だ。」

折江「帰る方向同じじゃん。」

稲森「ああ、だよね……。」

折江「うん……。」

稲森「……こないだ見たよ、折江くん。」

折江「え、」

稲森「新地橋ん広場におったでしょ。中華街のどこ。」

折江「……ああ、」

稲森「二週間くらい前かな。土曜日の夜に。」

折江「ああ、だったかも。」

稲森「声かけようかなーって思ったんだけど……。」

折江「稲森さんもあの広場よく行くの？」

稲森「よくは行かないけど。」

折江「あー、うん、そっか……。」

稲森「おばあちゃん来とって、みんなで中華料理食べに。」

折江「へえー。おばあちゃんどこに住んでるの？」

稲森「鹿児島。」

折江「鹿児島かー。」

稲森「うん。」

折江「灰とかやっぱすごいのかな。」

稲森「ハイ？」

折江「あの、ほら、桜島？」

稲森「ああ、うん。前行った時、窓開けられなかった。夏なのに。」

折江「へえー。」

稲森「洗濯物も外に干せなかったり。」

折江「えー。」

稲森「みんな困っとるみたい。」

折江「あーやっぱそうなんだ。」

稲森「うん。」

折江「俺行ったことなくてさー。」

稲森「ああ、だよ。あんま、行かないよね。」

折江「いつか屋久島に行きたいんだけどなー。稲森さん行ったことある？屋久島。」

稲森「ない。え、なんで屋久島？」

折江「や、俺『もののけ姫』が好きでさ。」

稲森「『もののけ姫』？」

折江「うん。あれ、知らん？宮崎駿の。」

稲森「や、知っとるけど。」

折江「屋久島の森、参考にしてるらしいよ、あれ。」

稲森「へえー、そうなんだー。」

折江「うん。『もののけ姫』いいよ。」

アナウンス「お待たせいたしました、まもなく、2番乗り場より小江原ニュータウン行き、発車いたします。お乗り忘れのないようご注意ください。」

稲森「何しとったの？」

折江「ん？」

稲森「新地橋ん広場で。」

アナウンス「ドアが閉まります。ご注意ください。ドアが閉まります。ご注意ください。」

折江「ああ、別に……」

稲森「案内板ん横んところにずっと座ったでしょ。」

折江「ああ……。」

稲森「いや、行きも帰りもおったからさ。何してるんだろーって。やっぱ、ずっといたの？」

折江「うん。」

稲森「なんか、待ち合わせとか？」

折江「いや。」

稲森「えー、なに？」

折江「……柵、あるやろ。あの広場。」

稲森「柵？」

折江「ぐるっと。あるじゃん。広場を囲むやつが。」

稲森「ああ。」

折江「……柵の角んところにさ、カップがのっかってたんよ。」

稲森「カップ？」

折江「小さなこんくらのカップ。空の。ひとつだけ。」

折江、カップの大きさを手振り以示す。

稲森「ああ。」

折江「俺さ、見た瞬間、ワンタンのカップかと思ったの。インスタントの。」

稲森「うん。」

折江「誰よ？ワンタン置いて帰りやがって！って。」

稲森「うん。」

折江「たぶん、中華街の入口だからそう思ったと思うんだよ。」

稲森「うん……。」

折江「雰囲気よ。そんな雰囲気じゃん？中華街、ワンタン。」

稲森「あー……。」

折江「でも近づいたらアイスのカップやった。いちごの。あまおうって書いてあった。」

稲森「……。」

折江「大きさも全然違うんだよ。アイスのカップは小さくて。」

稲森「だよね。」

折江「それで、なんでかなーって、考えとった……。」

稲森「え、何を？」

折江「や、反射的にワントンだと思ってしまった自分について、考えとったんよ。」

稲森「ああ……。そっか……。」

折江「そんな感じで。」

稲森「ずっと？」

折江「まあ……。」

稲森「ふうん。」

折江「まあ……そんな感じ。」

稲森「折江くん、中学んときもワントンみたいなこと考えとった？」

アナウンス「お待たせいたしました。まもなく住吉・青葉台団地・長与ニュータウン行き。

ご利用のお客様は、しばらくお待ちくださいませ。」

稲森「あ、もうすぐだね。」

折江「ああ……や、どうかなあ。」

稲森「まもなくって言ったよ。」

折江「いや、バスじゃなくて、中学んとき……。」

稲森「ああ……。」

折江「うん……。」

稲森「……折江くんは、走ることにしか考えとらんのかと思ってた。」

折江「ああ、だったかもなあ。」

稲森「だったんだ。」

折江「……やめたんだよ。」

稲森「え？」

折江「ああ、学校じゃないよ。陸上ね。」

稲森「そうなの？」

折江「うん。」

稲森「え、陸上部入らんかったの？」

折江「うん、あー、入ったけど、やめた……。」

稲森「そうなんだ……。」

折江「うん、まあ……。」

稲森「へえー……。」

折江「うん。」

稲森「……。」

折江「……。」

稲森「中3ん時さ、クラス対抗リレーでわたし、折江くんの次に走ったの。あ、体育祭の。」



折江「だったっけ？」

稲森「うん。足遅いからそうなったんだよ。折江くんからバトン貰って、走って、福田くんに渡した。」

折江「んー。あんま憶えてない。」

稲森「遅い人は速い人ふたりで挟むっていう作戦で。」

折江「ああ……。あれ？でも一番にはなれなかったよな？」

稲森「うん、2組が一番だった。」

折江「ああ……」

稲森「結局ね。」

折江「うん……」

稲森「なんか、はっきり憶えてるよ。」

折江「そっか。」

稲森「うん。」

折江「そっか……」

稲森「うん……」

折江「……あの場所さ、なんかずっといても飽きないんよ。」

稲森「？」

折江「新地橋の。」

稲森「ああ。よく行くの？」

折江「うん。」

稲森「ふうん……。あそこ、なんかおるよね。」

折江「え、なに、怖い系の話？」

稲森「違う違う。生き物。川に、なんか。」

折江「ああ。魚？」

稲森「何かな、あれ。ボラかなあ……」

と、朝永が戻って来る。

ふたりのとなりに座る。

朝永、レジ袋からまたチョコレートを出す。

朝永「バス、まだなんだ。」

稲森「あ、もうすぐです……」

朝永（稲森に）「食べる？」

稲森「いえ・・・。」

朝永（折江に）「食べます？」

折江「え、あ、じゃあ。」

朝永「ストロベリー。」

折江「あ、いただきます・・・。」

折江、チョコレートを貰って食べる。

朝永「友だち？」

折江「です。」

稲森「同級生です。中学校んときの。」

朝永「へー。そっかそっか。」

朝永、チョコレートを食べる。

アナウンス「大変お待たせいたしました。乗車案内をいたします。13時30分発、3番ホームより住吉・青葉台団地・長与ニュータウン行き。ご利用のお客様はご乗車くださいませ。」

稲森「あ。折江くん。」

折江「ああ、うん。」

稲森、折江、立ち上がる。

稲森「あ、じゃあ・・・。」

朝永「ああ、はい。」

折江「じゃあ。」

朝永「はい。」